

gunzou. 2022.9



題名	事務に狂う人々		
筆者	阿部 公彦		
No.	4.	副題	『ガリヴァー旅行記』 の情報処理能力
備考			

刷出

群像  
22年9月号

飼い慣らされる「目」

海外の都市を訪れ、公共交通機関を利用した人がしばしば漏らす感想がある。

「みんな、目が強い……」下手に車内を見回したりすると、ピンツと音を立てるようにして誰かの視線とぶつかつめる以外は、目はぼんやりとあいまいに宙を泳いでいたりする。目をそらすのでもなく、合わせるのでもなく、あいまいに相手と目の交流をする。一対一で会話をするときにも、相手の目をじつと見つめるといことは——とくに何か意図がある場合をのぞけば——あまりしない。もちろん日本でも大都市圏と、人口密度の比較的低い地域とでは人の視線の向け方がちがうだろう。牧草地の一本道で面識のない人とすれちがったとき、何となく相手と会釈するということがイギリスなどではよくあるが、日本でも田舎道ならありうる。ロンドンのピカデリーや渋谷のセンター街でそういうことをする人は——とくに意図がある場合をのぞけば——あまりいない。

このように目の向け方には方法や程度があり、その背後

には文化がある。もともと人は他の動物と同じで他者の「侵入」には敏感だと言われる。他者による空間的な侵入にはすぐに気がつく。ソマーが『人間の空間』で示したように、それは一種の防衛本能に発したものであるだろう。防衛ラインを越えて「パーソナルスペース」に入ってきたものには身体が反応する。身体的な侵入でなくとも、視線による侵犯にはセンサーが働く。誰かと目が合うと「あ、目が合った」とわかるし、誰かがこちらを見ていれば「はい？ 何か？」と反応する。

しかし、今や目の本能は、社会によって大きく制御されるようになった。私たちは本能にまかせて見たり、あるいは警戒したりするのではなく、社会の規範に沿う形で「見る／見ない」を調整する。見る行為は注意や意識として理解され、もとにある心の構えまで遡ってコントロールされる。そこで重視されるのは動物的で無意識的な「ナマの目」ではなく、意志や目的、意味である。人間の目はこうして精神的な裏付けを持った行為に変換されることで、社会化されてきた。

視線の規範化が大きく進んだ現代の社会では、「適切な注意」を向けることが要請される。たとえば他者への配慮や共感の善きものとして尊重され、ときには責務としても課されるが、逆に必要もないのに過剰な注意を向けたり、執着的な関心を持つたりすることは不適切な行為として戒められる。規範から外れた注意の向け方をする人は、「天

てである。しかし、それ以前から事務の精神は醸成されてきた。その顕著な現れが「目の変化」である。一七世紀から一八世紀にかけての初期近代は、人間の目の「機能」が飛躍的に高まった時期だった。さまざまな装置の開発や知識の深まりで目がカバールする領域は広がり、世界はより視覚的に把握され始めた。目は元々の機能をはるかに超えた潜在力を持つようになる。もはや目であつて、目ではない。対象をとらえるのも直接的ではなく間接的に、たとえば羅針盤、望遠鏡、眼鏡、顕微鏡といった媒介物（メディア）を通す。船上から地図をたよりに陸地の位置を把握したり、遠い山地をレンズ越しに見やったりするのは、いずれも視覚の延長上にある行為だが、そこでは目をいかに凝らすかより、道具をどう管理し活用するかが大事になる。直感や本能より、器具の調整や数値が優先されるのである。

この時代の文学作品にも、しばしばそんな新しい目の境地が描き出された。ジョンサン・スウィフトの『ガリヴァー旅行記』（一七二六年）は時代を代表する作品の一つだが、そこではたつぷりと目の寓話が語られる。物語には目の機能を拡張させるのに寄与した装置やメディアが登場し、現地の人々との交流の中で、「注意の規範」もおおいに意識される。

『ガリヴァー旅行記』といえど誰もがまず思い浮かべるのは、主人公が小人の国に迷い込んで囚われの身になる場面

然「無意識過剰」などと緩やかなからかいの対象となったり、「不注意」「注意散漫」といった教育的なコメントを受けたり、ときには「神経に障る」「空気が読めない」「こたわる」「しつこい」「頑固」「いやらしい」といったレッテルを貼られ、社会の主流から排除される。注意・不注意という対立軸は些末で軽いものと見えるかもしれないが、注意の向け方をめぐる細かい規範は社会の基盤に食い込み、私たちの常識に浸透している。

こうした「注意の規範化」は、人間活動の事務処理化を支えてきた。適切な事務処理を可能にするのは、世界を整理するための枠である。この枠は整理棚、書類、罫線、セルといった具体的な形式を持ちながら、私たちにルールの遵守や、処理の速さ・正確さを尊ぶ価値観を植え付ける。鍵になるのは、枠をしつかりと見極め守るための注意の力である。「注意深さ」という心のあり方があればこそ、事務の精神も生きる。矮小であることをいとわず、細かいものをあえてとらえる辛抱強い注意の目が、事務の文化を育んできた。

### 『ガリヴァー旅行記』の「目の寓話」

事務の黎明期はどのくらいまで遡ることができるのだろうか。第一回でも見たように、事務が権力としてヨーロッパ史の前面に躍り出てくるのは一八世紀から一九世紀にかけ

だろう。船が難破し命からがら陸地にたどり着いたガリヴァーは疲労困憊して眠りに落ちるが、目が覚めると手足から髪の毛に至るまで身体中が紐で地面に縛りつけられている。そして、ふと見ると六インチのサイズの小さな人間たちが自分の身体をよじ登ってくる。ガリヴァーが仰天して声をあげると、驚いた小人たちは転げ落ちて怪我をしたりする。このファンタジックで滑稽な場面は、作品の表紙や挿絵にも頻繁に使われてきた。

しかし、出だしこそ囚われの身となるガリヴァーだが、この小人国リリパットの君主に歓待を受けてからは、たちまち土地と文化になじんでいく。言語を習得するのも早い。宮廷のしきたりも学んだ。そのガリヴァーが大きな活躍をするのは、宮殿で火事が起きたときだった。火事の報を受けたガリヴァーは上着を着ておらずそれで火を消し止めることはかなわなかったが、たまたま豊富な尿意を催していた。そこで、火に向けてたつぷりと放尿することで、見事火を消し止めたのである。それ以前にもガリヴァーは、敵対関係にある隣国の艦隊を一網打尽とばかりにまとめて引っ張っていくなど巨人ならではの活躍をしている。放尿シーンは似たような場面がフランソワ・ラブレールの『パンタグリユエル物語』にもあり、以前から存在するロマンスや物語群の影響を感じさせる。そういう意味ではこの作品には伝統的な奇譚の要素がおおいにあると言える。『ガリヴァー旅行記』はこのリリパット国への旅だけで終

わるものではない。ガリヴァーはいったんは帰還するものの、その後も航海に出てはトラブルに遭遇して奇妙な国に逢着し、珍奇な体験をして戻ってくるというパターンを繰り返す。ただし、小人国につづいて迷いこむ巨人国や、その次に訪れる空中の島ラビュータ、さらには馬が支配者として君臨し、人間そっくりの獣ヤブーを支配するフィヌム国での体験をへるに及んで、次第に作品世界は暗いムードに覆われる。当初は奇想天外な冒険譚が主軸だったのが、現実の政治や、著者スウィフトの人間関係、とくに私怨や厭世的な人間観などが垣間見えるようになり、作品に毒気を吹きこんでくる。

そんな中、「目の寓話」がはつきり立ち上がってくるのは第三篇である。空飛ぶ島ラビュータには、この時代の新しい目の扱いが感じられる。この国の支配的な住人たちは、たとえば第一篇のリリパット国の小人たちや、第二篇のプロブディンナグ国の巨人たちのようなわかりやすい怪異さはない。しかし、彼らもどこか異様なのである。頭を傾け、上の空で、目がどこを向いているのかよくわからない。どうやら深い思索にふけっている。その服には太陽や月などがデザインされ、横笛や堅琴などさまざまな楽器があしらわれる。ガリヴァーたち訪問者が会いに来てでも考え事にふけていて気がつかない。どうやらこの上の空ぶりはいつものことのように、こうした状態に陥ったときは、お付きの者たちがふくらませた豚の膀胱を先につけた竿で

彼らの顔を叩くことになっている。ぼおつとしていた人は叩かれるとはつと目覚めたようになり、慌てて眼前の仕事に立ち戻るのである。

ラビュータの住人の振る舞いは実に奇妙で、呆けているようにも見える。しかし、彼らは頭脳の活動が停滞しているのではない。むしろ逆で、彼らは非常に高い知的能力を有している。彼らの服にあしらわれた天体と楽器のイメージの組み合わせは当時の天文学をあらわしていた。こうして見るとラビュータの住人たちは、王立協会の科学者たちと類似しているのだ。たとえば定規と分度器を使う作業は得意でも実生活のことはまるでため、数学と音楽以外のことには頭がまるまわらないといった人も出てくる。この篇では抽象的な思弁に没頭しがちな、浮世離れた科学者たちが揶揄されていると言える。

#### 実在した注意散漫の人たち

スウィフトの周辺にはこうした奇妙な人物たちが実在したらしい。科学者としては高い能力を発揮するものの、実生活ではおよそ無能。文章を書けば、鋭い風刺で人を楽しませることができけれど、ときにぼおつとして注意散漫の極みに至る。そもそもスウィフトの風刺は、王立協会的主導した「新科学」の路線に向けられていた。科学中心主義が迷走すれば、およそ非現実的な発想をするようになる

る。科学者たちは、言葉と物が一致するような理想の境地があると考え、この理念に沿う形で英語を改良しようと考えた。たとえば言葉を単純化し、表す物の数と言葉の数とを同じにすれば、言葉と物のずれはなくなると考えたりしたのである。

スウィフトは言葉を無理矢理に物に従属させようとするこのような思考の愚かさを徹底的に風刺した。ラビュータ島の言語学者の次のような珍奇な提案は、まさにこの愚かさを具現したものである。

「言葉を使えば使うほど肺が疲弊し、私たちの寿命は縮む」

「言葉など所詮、物を指し示す名前にすぎない」

「いっそ言葉を廃止し、話題の内容を示す物そのものを携帯すれば便利だ」

しかし、言葉を使うかわりに物を携帯することにしたラビュータ島の人々は荷物が増えて腰に負担がかかり、荷物を運ぶための召し使いが別途必要になってしまふ。

あまりに極端なカリカチュアなので、そのバカバカしさばかりが目につくかもしれないが、実はこの「言葉＝物」という発想には事務的思考も見て取れる。第二回でも触れ

たように、事務とは「現場におけるモノあるいはコトのながれを管理するために、それに対応するところのシンボルのながれをつくりだし、それを操作すること」(梅棹忠夫)なのである。事務的思考の背後には、言葉を道具として何かに従属させようとする姿勢がある。この従属関係を足がかりにして現実世界をコントロールするのである。言うまでもなくこれは科学者たちの世界像と重なる。物と言葉とを一致させれば、世界を科学的に説明する言葉が得られる。しかし、それだけではない。科学が主に物質界の現象を扱うのに対し、事務の世界ではそれに加えて人間が取り組むさまざまな事象をも、同一平面に載せようとする。つまり、「物の世界」だけではなく、人間が生み出す「事の世界」も言葉＝物と同じ平面に載せるのである。事務が書類や磁気媒体などの物質的な記録装置に特有のこだわりを示すのもこのことと関係するだろう。言葉を介することで、「事の世界」が「物の世界」に生まれ変わっていく。事務ならでは「物」信奉がそこには見て取れる。

スウィフトはこうした思考の危うさを敏感にとらえ、ときには徹底的にあげつらってみせる。しかし、『ガリヴァー旅行記』の主人公ガリヴァーは必ずしもスウィフトと重なるわけではなく、ときには事務的な視線や注意の規範に飲み込まれもする。さらに言えば、スウィフト自身の立ち位置もそれほど明確だったわけではなく、科学者たちとの間柄も単純な敵味方関係では説明できない。たとえばジョ